

ガルダあるいはルクの飛翔 ——大航海時代の巨鳥伝説——

合 田 昌 史

1 マゼランの巨鳥

インドのガルダ（ガルダ）、ペルシアのシームルグ、ペルシア=アラビアのルク（ルフ、ロック）、エジプトのフェニックス、ヨーロッパのグリフィン、アメリカのサンダーバード（ワキヤン）、アイヌのフリユー、中国の鳳凰・大鵬など、聖鳥あるいは怪鳥の伝説や神話は東西にわたって広く分布している。そのなかでもひととき異彩を放つのは大型生物をとらえて羽ばたく巨鳥の物語である。たとえば、ガルダとルクは象や水牛、サンダーバードやフリユーにいたっては鯨を運ぶ。私は中世から大航海時代にかけてこういった伝承の一部が航海や海洋地理に関わりのある文脈におかれていることに気づき、その意味を考えるようになった。

きっかけとなったのはマゼラン航海の寓意画である [図1]。これはブルージュ生まれの画家ヨハネス・ストラダヌスの原画 [図2] に基づいて1585～92年頃アントウェルペンで出版された四枚の寓意画集『アメリカ再発見Americae Retectio』の第4葉である。「火の土地」と矢を飲むパタゴニアの巨人の間、すなわちマゼラン海峡をゆく帆船はマストが折れ、傍らではセイレンが誘惑の歌を聞かせているが、左手舷側で浮遊する太陽神アポロの導きと右上の風神アイオロスの助力を得て、今まさに「南の海」すなわち太平洋へ乗り出そうとしている。ところが、司令官マゼランは海上に目を向けることなく、まるで学者のように両脚器を片手に机上の天球儀を凝視している。ここにはマゼランと対等な共同総司令官に任ぜられながら出帆の直前に排斥された天地学者レイ・ファレイロの姿と、「世界分割」の言説を実験する野心的な軍人マゼランの姿が



【図1】『アメリカ再発見』第4葉(シカゴ・ニューベリー図書館所蔵)



【図2】『マゼラン像』(フィレンツェ・ラウレンティアナ文書館所蔵)

二重写しになっている。しかし、一見して不可解なのは左上で象をつかんで飛翔する巨鳥の寓意である。マゼランと巨鳥はどのような関係を持つのであろう

か。

マゼラン像の巨鳥についてはじめて立ち入った図像学的考察を行ったのはルドルフ・ワイトカウアーである。その「奇跡の鳥類」(1938年)の第2節「ロック・・・・あるオランダ版画に見る東方の驚異」によると、象をとらえた巨鳥はアントニオ・ピガフェッタが記述を残した伝説の鳥「ロック(ルク)」である。この絵のコスモロジカルな起源はインドの太陽鳥ガルーダと地下の蛇ナーガとの戦いにある。ナーガは蛇ばかりでなく象をも意味しており、『マハーバータ』と『ラーマーヤナ』では象と亀をとらえたガルーダが描かれている。アラブでは13世紀カズウィーニーの地理書、15世紀イブン・アルワルディーの自然誌にもルクは登場するが、影響力という点では千夜一夜物語の「船乗りシンドバード」が重要である。ルクの存在は航海者の心中に深く刻み込まれ、14世紀イブン・バトゥータの旅行記でも描かれた。その影響はヨーロッパに波及した。なかでもくわしいのはルクの故地をマダガスカル島とするマルコ・ポーロの記述である。その1世紀前のベンヤミン・デ・トゥデーラも同様の話を残しており、ベンヤミンを経由して伝承はドイツの叙事詩『エルンスト公』に載せられた。他に14世紀マンデヴィルの記述、15世紀のニコロ・コンティの記述とフラ・マウロ世界図にも見られる。ストラダヌスはピガフェッタの話に絵をつけるにあたってロック鳥のペルシア的表現を参考にしたはずである。ストラダヌスのデザインは同時代人の探検書や史書ばかりでなくウリッセ・アルドロヴァンディの鳥類誌にも影響を与えた。^①

以上のように、ワイトカウアーは、象をとらえる巨鳥はインドのガルーダに起源するが、ヨーロッパへの影響という点ではペルシア=アラビアのルク(ロック)が重要である、とみている。しかし、巨鳥とマゼランとを結びつける直接の情報源とおぼしきピガフェッタは、巨鳥の名としてルクではなく明確にガルーダをあげている。^② 古来からヨーロッパではグリフィンはしばしば言及されていたし、中世ではルクの名も知られていた。たとえば、マルコ・ポーロはモグダシオ島(マダガスカルあるいはモガディシオ)に関する記述のなかで、象をつかんで空を飛ぶ巨大なルク(リュ)鳥の存在を伝聞で知り、それをグリフィンに比定している。^③ 他方、ガルーダはほとんど知られていなかったはずである。なぜピガフェッタはグリフィンやルクのイメージにとらわれなかった

のであろうか。おそらくそれは彼が航海の現場でこの話を採取したことと関連があると思われるのであるが、この点に踏み込む前にグリフィンとルクに関する類話について整理しておきたい。

2 巨大化するグリフィン

英語のgriffin, フランス語のgriffon, ドイツ語のGreifはギリシア語のgrypsに由来するが、その名の付けられた獅子と鷲の合体獣はメソポタミア起源とされる。四つ足で翼を持ち、頭部は獅子のものと鷲のものに分かれる。古典記のギリシアで定着したのは鷲頭のグリフィンである。ヘロドトスはプロコンネソス出身のアリステアスによって次のような「黄金をまもる怪鳥グリュプス」の伝承を記している。

ヨーロッパの北方には他と比較にならないほどの多量の金がある。イッセドネス人によると、一眼のアリマスポイ人の国と極北のヒュベルボレオイ人の国の間に怪鳥グリュプスの群があり、金を護っているが、アリマスポイ人がこれを奪ってくる。^④

林俊雄によると、ヘロドトスのいう「ヨーロッパの北方」とはウラルやアルタイを指す。^⑤ E. D. フィリップスは、アルタイ系諸族に伝わる金を護る龍の伝説が起源であろう、と推測している。^⑥ フィロストラトス、ポンポニウス・メラ、ソリヌスといった後世の著述家たちはこのヘロドトスの他、パウサニヤス、アイリアノス、プリニウスに依拠してグリュプスの記述を残した。ただし、Ch.A.Tuczayに言わせると、古代のギリシア語ないしラテン語の著述家はグリュプスが翼と嘴をもつとしながらも、飛翔するものとしては描いていない。山中で宝を守護する4つ足獣であったグリュプスが天空を翔る強力な猛禽に変貌させられたのは中世のロマンスにおいてである、と。^⑦

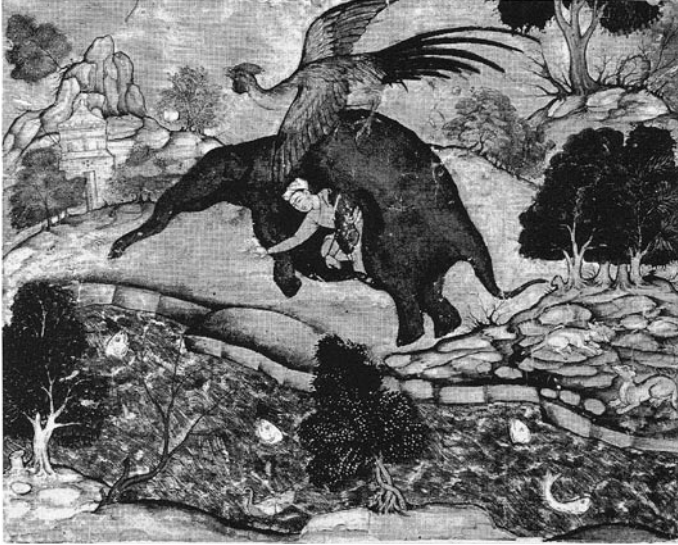
たしかに、「アレクサンドロス・ロマンス」では4頭のグリュプスの牽く馬車でアレクサンドロスが飛行を楽しんだ。12世紀前半ドイツ語の叙事詩『ゲートルン』ではグリフィンは単独で人を運ぶほど巨大化した。さらに、12世紀後半スペインのベンヤミン・デ・トゥデーラとドイツの『エルンスト公』は、鳥の餌食に擬態するという共通の方法で窮地からの脱出を描いている。エルン

トは「東方」への航海で「磁石の山」に引きつけられて船が難破し死に瀕するが、獣皮にくるまったところ、グライフにつかまれてその巢のある山に運ばれた [図3]。ベンヤミン・デ・トゥデーラによると、「ニクパの海」では暴風のため船は動けなくなるが、船乗りは用意した牛皮に身を包み水中に飛び込むと、グリフィンがそれを動物と信じてつかみあげ山上ないし穴の中へおく。^⑤



【図3】『グライフに運ばれる獣皮の人』(アントン・ヅルク版『エルンスト公』所収)

Tuczayは、このようなグリフィンないし巨鳥による救出譚は不明の「東方」の文献からアレクサンドロス・ロマンスへ移植された、と推測しているが、岩本裕は、巨鳥による救出というモチーフはもともと2～3世紀頃のインドの文献に現れ、のちにアラビアに伝播した、と考えている。亡失の物語集『ブリハット・カタール』のサンスクリット改稿本『カタール・サリット・サーガラ』の「黄金城物語」によると、主人公シャクティ・デーヴァの船は航海の途中大渦巻に引き込まれたが、大渦巻の中心に屹立する榕樹の枝に取りすがり、この樹に飛来したガルーダの羽根にひそんで黄金城に到達した。また、『ブリハット・カタール』の別のサンスクリット改稿本『ブリハット・カタール・シュローカサンガラハ』によると、主人公サーヌダーサは血の滴る山羊の皮を被って巨鳥にとら



【図4】『象皮を被り巨鳥シームルグに運ばれる男』
(16世紀末, エドウィン・ビニー3世コレクション所蔵)

われ「黄金国」(スヴァルナ・ブーミ)に近づいた[図4]。この奇譚は種々の形でシンドバードの物語などのアラビア文献にみられる, という。^⑨

3 家島彦一の見解

イスラーム世界におけるルク(ルフ)鳥伝説については家島彦一の見解がある。家島は14世紀イブン・バットウータ『大旅行記』の解説と注および9世紀頃の『中国とインドの諸情報についての第一の書』の注において伝説の起源と分布を以下のように分析している。

- ①ルク鳥に関する最も古い記録は10世紀半ばのズルク・ブン・シャフリヤール『インドの驚異譚』にある。シンドバードの2回目の航海, ベンヤミン・デ・トゥデーラ, マルコ・ポーロ, 周去非『嶺外代答』, 趙汝適『諸蕃誌』にも類似の話が伝えられた。そのほか, アジャーイブすなわち世界の驚異譚のジャンルの著者たち(アブー・ハーミド・アルアンダルスィー, カズウィーニー, デイマシュキー, イブン・アルワルディーなど)はルク

鳥の伝説を「海の驚異譚」を代表するものとして採録した。『大旅行記』の編纂者であるイブン・ジュザイイはアジャーイブ書などに含まれる奇異・希少な東方の境域世界の情報、たとえば女王国、ルク鳥、奈落伝説などを織り交ぜることで旅行記に一層の面白さと地理的広がりを持たせようとした。

- ②『大旅行記』においてルク鳥の伝説はタワーリスィー国（おそらくチャンパ付近）の近くから42日間漂流したのちの記述に挿入されており、おそらく南シナ海を南下しボルネオ海を航海したと思われる。同海域は夏季に台風が頻繁に発生し、また西沙、中沙や南沙などの群島や珊瑚礁の浅瀬が多いため、危険な海として知られた。『大旅行記』で語られるルク鳥の伝説は、台風による竜巻現象が船乗りの伝聞の中で伝説化したものであろう。あるいは台風の時に見られる大気の放電現象の一種を指したものとも考えられる。たとえば、イブン・アルファキーフによると、船人たちはサンジー（サンヒー；漲海=南シナ海）の海で大時化（台風）にあったときに「船の帆柱の天辺にあたかも火炎のような形の鳥を見たならば、まさにそれは彼らにとって無事助かるという証拠である」と語る。

- ③ルク鳥はかつてマダガスカル島に生息していた絶滅種の巨鳥 *Aepyornis maximus* が船乗りたちを通じて伝説化したものであるが、マダガスカル島に起源する伝説が東南アジアを航海する部分で取りあげられたのはイスラーム地理概念の伝統に基づく。すなわち、イブン・ハウカルやイドリスィーに代表される地理概念によると、インド洋は大地を取り巻く「周海」の東側に位置する入り江であるため、アフリカ大陸の先端部は東に大きく引き伸ばされて東南アジアや中国と向かい合っている。そのためルク鳥の棲むマダガスカル島は周海とインド洋の入江との出入口付近に位置づけられ、東アフリカと東南アジアの両方から至近の位置にあると考えられた。^⑩

以上のように、家鳥は①でルク鳥伝説を「海の驚異譚」の枠の中でとらえたうえで、『大旅行記』で南シナ海にルク鳥がおかれたことの原因を②台風による竜巻ないし放電現象と③「周海」の地理概念で説明している。興味深い見解である。

ただし、家鳥説にはいくつか留保したい点がある。まず、②については海域

の竜巻は台風と無関係に生じる場合がある。従来、竜巻の発生は中緯度で多く、熱帯域では（海洋上をふくめ）ほとんど見られないとされていたが、近年太平洋熱帯域における水上竜巻の発生報告がいくつかよせられている。^⑪ また、1942年の南方調査室監修『馬來語大辞典』には、フィリピンやボルネオ、小スンダ列島等、赤道直下に多い現象として水上竜巻が記載されている。すなわち、「水面上高く天に向かって漏斗状の管柱が起立しこれを船上より遠望すれば大蛇の逆巻く尾の如く、又海水が水天に吹き上げられるように見え」る、と。^⑫

つぎに③について。そもそも伝説の起源はマダガスカル島の飛べない絶滅種にあるのだろうか。東南アジアからマダガスカル島へ伝説が移転した可能性はないのだろうか。『大旅行記』のみならず家島が引用する他の文献においてルクは南シナ海あるいは東南アジア島嶼部に布置される。『アラビアンナイト』の405夜「アブドゥル・ラフマーン・アル・マグリビーが語った巨鳥ルクの話」ではルクは「シナの海」に、「シンドバードの2回目の航海」では「樟脳〔竜脳〕の島」におかれている。^⑬ おそらくこの島はボルネオあるいはスマトラである。9世紀半ばイブン・フルダーズビフの『諸道と諸国の書』はザーバジュ〔この場合はスマトラ〕の巨大な竜脳樹に言及しており、トメ・ピレスとピガフェッタはブルネイの竜脳に注目した。^⑭ ルク初出というブズルク・ブン・シャフリヤール『インドの驚異譚』によると、ルクはマダガスカル島ではなく東アフリカ・ザンジウのスファアラに棲んでいた。^⑮ イドリースーによると、ザンジウの人々は大洋航海に耐える舟を持たなかったが、ザーバジュ（ジャワないスマトラ）の人々は大小の舟でザンジウに交易に訪れており、両者間で意思の疎通に障害はなかった。^⑯ 家島説②とのかねあいも問題であろう。航海の難所はあまたある。モザンビーク海峡もその一つであった。説話の起源がいずれにあるにせよ、なぜ南シナ海あるいは東南アジア島嶼部に情報が集中するようになったのであろうか。

4 弘末雅士の見解

この点で傾聴に値するのは航海の現場に近い文脈で驚異譚をとらえようとした弘末雅士の論説である。弘末は、10世紀以降アラブと中国の航海者が頻繁に

マラッカ海峡を往来するようになると、中国・アラブ・ペルシアの文献のなかで東南アジアの女人国のイメージが発展していくことに着目し、そのイメージ形成における現地海洋民の正負両面にわたる役割を強調した。とりわけ16～17世紀の東南アジアにおいて現地の水先案内人は外来商人と地元社会とを仲介する役割を果たしたが、他方では、仲介者としての立場をまもるために両者間を分け隔てようとした。16世紀初頭のポルトガル人トメ・ピレスやイタリア人アントニオ・ピガフェッタによって採録された女人国・食人・大渦巻きなどの伝承はその文脈のなかにある、というのである。以下本稿に関わる限りにおいてその要旨を紹介する。

ピガフェッタの乗船するスペインのビクトリア号はモルッカ諸島のティドーレ王から水先案内人2名を提供され、モルッカ諸島から小スンダ諸島を経てインド洋を目指した。敵対するポルトガル船との遭遇を回避するためであった。ピガフェッタは現地航海者の情報を高く評価していた。ビクトリア号は1522年1月25日チモール島を出てジャワ島の南岸・スマトラ島の西岸沿いを進んだ。この海域はマラッカ海峡よりも荒く、アラブ人やヨーロッパ人の間には近海諸島と沿岸の住民は食人種だという噂があった。現地航海者の案内はさらに重要となった。この頃モルッカ諸島の老水先案内人は大ジャヴァの下にあるオコロロという女人島についてピガフェッタに語った。女たちは風で孕み女の子だけを養育し訪れる男は皆殺す、と。同様の説話は1510年代にスマトラ島西岸を訪れたトメ・ピレスも述べている。スマトラ島西岸の住人は、インド洋からの風は女性を妊娠させるほどの生産力を持つのであり、海洋の中心には巨大な植物と動物が存在すると考えている、と。ピガフェッタによると、モルッカの老水先案内人は女人島オコロロの話に続いて南シナ海にある風力の源について語った。説話によると、シナの湾（南シナ海）の中心には巨木があり、そこに巨鳥ガルーダが棲む。巨木の名は「風の間」を意味するカムボンガンギンで、巨木の実の名は「風の実」を意味するブアバンガンギである。ビクトリア号に同乗していたブルネイのイスラーム教徒は体験を交えてこの説話を裏書きした。ピガフェッタの当該テキストは海洋の力の源に関する東南アジア人の認識を明示している。¹⁷⁾

弘末説は語りの場の背景にふみこんだうえで、ピガフェッタが伝える女人島と巨鳥のふたつの伝説を「風の力」という共通の概念のもとでとらえており、たいへん興味深い。だが、テキストの解釈において異論があるので、以下、巨鳥に関するピガフェッタのテキストに即して検討しておきたい。

5 大渦巻き of 解釈をめぐって

以下の引用はピガフェッタ航海記の4つの初期写本のうち失われた原本に最も近いとされるミラノのアンプロジアナ文書館所蔵イタリア語写本Dのロバートソン版から行うが、パリの国立図書館所蔵フランス語写本Aのデヌセ版、イエール大学所蔵フランス語写本Cのスケルトン版、初期フランス語刊本E（コリーヌ版）およびラムジオ版と比較照合し、キータームについて写本Dのロバートソン版と差異がある場合は（ ）内に注記した。写本Dのモスト版と長南実による邦訳版、写本Aのラゴアによるポルトガル語版、新たに初期写本・刊本が突き合わされ校訂されたアンドレア・カノヴァ版も参照した。^⑧ []内は引用者の補足である。当該の記述は情報源によって三つの部分に分けられる。

- ①「マルーコ [モルッカ諸島] からわれわれに同行してきた水先案内の老人」によると、大ジャヴァの北方、古人らが大湾区と呼んだシナの湾にガルーダ鳥が棲む巨木がある。その場所はプザタエルpuzathaer（Eとラムジオ版では、プサタエルbusathaer）という。そこへ巨鳥は水牛ないし象を運ぶ。その木はcam panganghiカム・パンガンギ（A・Cでは、カユ・パウガンギcaiu paugganghi）、その実はbua panganghiブア・パンガンギ（A・Cでは、ブア・パウガンギbua paugganghi）といい、スイカよりも大きい。
- ②「われわれが船に乗せていたブルネ[ブルネイ]のモロたち」の話では、彼らは巨木の実を見たことがある。彼らブルネの王はシャム王国からその実を贈呈されたからだ、と。
- ③ある少年の話 [直接の情報源は不明]によると、巨木にはどんな船も3～4レゲのところまでしか近づけない。その周りの海に大渦巻きrevolutione（A・Cでは、oraiges）があるからである。あの木のことがは

じめて知られたのは、風で渦巻きのただ中に流されたある船 [のためである]。船はばらばらになり乗員は皆おぼれ死んだが、ひとりの少年だけが板さねにつかまって奇跡的にあの木の近くへ流された。少年は悟られることなく木によじ登り、巨鳥の翼の下にもぐり込んだ。翌日その鳥が海岸へゆき水牛をとらえたその時に少年は首尾よく翼の下から脱出した。ことの顛末は少年の口から語られ近辺の人々は海でときおり見つかると実 [セイシェル産のフタゴヤシ] がその木に由来することを知った。

渦巻きに関わる2つの名辞は解釈が分かれる。前述のように弘末雅士は、写本Dの巨木カム・パンガンギを「風の間」Kampongangin、巨木の実ブア・パンガンギを「風の実」Buahpanganginと解している。他方、アンドレア・カノヴァは、巨木とその実の名に関して写本Dのカム・パンガンギ、ブア・パンガンギではなく、写本A・写本Cのカユ・パウガンギ、ブア・パウガンギの綴りを採用し、「黒いマンゴーの木」kaju pauh djangii、「黒いマンゴーの実」buah pauh djangiiと解している。また、渦巻きの中心地にあてられた名プザタエルについて多くの研究者は解釈を避けてきたが、カノヴァは「水の中心」を意味するマラヨ語pusat airに由来するとみている。¹⁹

断定は難しいものの、以下に引用する17世紀の博物学者ルンフィウスによる類似の記述を考慮に入れると、カノヴァの解釈は有力であろう。

その樹はパウセンギpausengiと呼ばれる。その頂部は水面上に出る。枝部には野鳥ゲルダが棲む。おそらくはグリフィンで、夜間近辺を飛び回り、象・虎・犀などの大型獣を爪と嘴でとらえ巣まで運ぶ。この樹の回りに全方位から海流が引き寄せられ、ひきずられた船舶はそこにいつまでもとどまらざるを得なくなり、人々は飢え死にするか、あるいはゲルダの餌食となる。それゆえにジャワ人やチモールまでの東方の大諸島の南岸に住む人々は陸地が見えなくなる3マイルの距離以上は外に出ようとはしない。海流がさらに南方へ運んでいるとわかると、彼らは漕ぎ船にたよって船は流れに任せ、陸に向かって漕ぐ。パウセンギの深淵に引き込まれることをおそれるからだ。そこからは誰も生還しない。ジャワ人のなかにはこのことを経験し真実として報告するものもあるという。船でそこに行ったが、ゲルダがジャワまで運んでくれた。その羽根にしがみついていた、と。彼

らはこの木の実をボア・パウセングあるいはボア・セングという。おそらくは有名な海カラプスである。これは海流に逆らって進み、ときおりジャワヤソロルの浜に打ち上げられる。²¹

カノヴァの解釈に立つと、渦巻きの主因は弘末説の「風の力」ではなく特殊な海流の牽引力であった、ということになる。この点で想起されるのは「磁石島（山）」の説話である。野間三郎によると、海中に磁石島があり、船舶を引き寄せ難破せしめるという説話は、古くは後漢楊孚撰『異物志』やプトレマイオスに見えるが、千夜一夜物語の「第三の托鉢僧」で最も広く伝承され、『エルンスト公』やマンデヴィルの『東方旅行記』にも取り込まれた。この説話の起源については、木釘で締め椰子の索で縫合した無鉄釘の舟の存在と磁石に関する知識とが結合した結果であるとする説が有力視されている。だが、野間はこの縫合船発生説を批判し、むしろ岩礁や潮流などのために渦流の生ずる海上の難所が語り伝えられ、陸上の磁石山の知識がこれに結合して磁石島説話が生まれた、と主張する。たとえば、ルイシュ図や狂言「磁石」・「竹齋」は磁石島が渦流に出ることを示しており、『異物志』の記述「漲海崎頭水淺而多磁石」、プトレマイオスとパラディオスのマニオライに関する記述は岩礁の多い地であることを示唆し、「第三の托鉢僧」は潮流を記載する、と。²²

野間説の要点、すなわち暗礁と渦流の関連を巨鳥伝説の考察に引き寄せると、以下のような仮説が成り立つのではなかろうか。

巨鳥伝説の一部は渦巻現象に関係しているが、それは大別して二種ある。ひとつは水面から上空へ吹き上げる力によるもの。家島はこの種の高難に着目している。もうひとつは水面から下へ引き込む力。ピガフェッタのガルーダ説話はこちらに類する。ただし、その主因は風力ではなく暗礁による潮流である。この場合、空を行く巨鳥の本性と相容れない力が働いているためであろうか、説話において巨鳥よりも海の渦巻きへの畏怖に重心が置かれる。ピガフェッタのガルーダは人ではなく大型獣をとらえ、むしろ結果的に人を救う。大航海時代前夜でこの説話に近いのは、ペルシア=アラビアの「第三の托鉢僧」とその影響を受けたとおぼしきドイツの『エルンスト公』である。いずれも主人公は磁石島（山）に引きつけられて船が難破し死に瀕するが、巨鳥（ルクあるいはグライフ）の餌食に擬態して窮地から脱出する。しかし、巨鳥の名を含めて中

世の両説話以上にピガフェッタのガルーダ説話に近いのは先に引用したサンスクリット文献の説話である。すなわち、『カター・サリット・サーガラ』の「黄金城物語」によると、主人公は航海の途中大渦巻に引き込まれるが、その中心の海中に生える榕樹にとりすがり、そこに飛来したガルーダの羽根にひそんで脱出した。磁石島および鳥の餌食への擬態という印象深い荒唐無稽な2つのモチーフは海難を招く暗礁と渦巻きの現場から遠く離れたところで付け加えられたのであって、ピガフェッタのガルーダ説話が古い文献の説話に近似しているのは、彼が南シナ海の家難の多い海域の事情に通じた航海者たちから取材し、元の形で保持された伝承を採録できたためであろう。

もう一点付言したいのは取材する側の戦略的意図である。ポルトガルとスペインは16世紀初頭、中国への路を視野に入れながら香料諸島（モルッカ諸島・バンダ諸島・アンボイナ島）への進出を図り「黄金諸島」のありかを探っていた。香料諸島にはポルトガルが先着していたため、マゼランのスペイン隊は伝説の黄金諸島を狙って北緯12～13度で西太平洋を西進し結果的にフィリピン中部ビサヤ諸島にゆきついたが、南シナ海を挟んでさらに西方の（トメ・ピレスによって金の産地とされた）チャンパあるいはコチンシナなどに出会うことを想定していたかもしれない。南シナ海には海難事故を招く多くの難所があるが、実のところ、北緯12～13度の海域はとりわけ危険な中沙群島と南沙群島の間にあたり、難所をすり抜ける航路となっていた。難所の知識は黄金諸島のみならず、その北にある広大な中国市場への接近を可能にしてくれるはずであった。

重要なのは、マゼランの死(1521年4月)後のスペイン隊がたどった航跡が、中国南部と東南アジア島嶼部とをつなぐかつての幹線航路「東洋針路」の南部に重なっていたことである。13世紀末のジャワ元寇で広州から海南島とチャンパを経てシャム・ボルネオ・マレー半島方面へのびる伝統的な西洋針路が打撃を受けたため、泉州から台湾西部とフィリピン諸島諸島西部を経て南西のブルネイ方面へ、あるいは南東のスルー海域・香料諸島・チモール島へのびる東洋針路が成立した。東洋針路は15世紀のうちに衰退しており、ポルトガルはマラッカから西洋針路で中国に接近し1515～1521年広東沖に交易拠点を得た。マゼランのスペイン隊到来までの時点でポルトガルがモルッカ諸島以北の東洋針路を復活させたとか、あるいは西洋針路と東洋針路の結節点にあたるブルネイ

に到達したことを明示する証拠はない。ポルトガルを出し抜きたいスペイン隊は南シナ海の難所と東洋針路の知識を現地水先案内人たちに求めており、その文脈で「シナの湾」の巨鳥伝説が引きだされたのではないだろうか。

- ① R.ウィトカウアー(大野芳材,西野嘉章訳)『アレゴリーとシンボル: 図像の東西交渉史』平凡社, 1991年, 172-178.
- ② アントニオ・ピガフェッタ(長南実訳)「マガリャンイス最初の世界一周航海」大航海時代叢書1, 岩波書店, 1965年, 657-658.
- ③ マルコ・ポーロ(月村辰雄・久保田勝一訳)『驚異の書』fr.2810写本, 岩波書店, 2002年, 178-179; 愛宕松男訳注『東方見聞録』2, 平凡社, 東洋文庫183, 1971年, 236-40; Henry Yule, *The Book of Ser Marco Polo*, London, 1874, 404-410.
- ④ *Historiae*, 3:116,4:13,27. ヘロドトス(松平千秋訳)『歴史』, 岩波書店, 1971-72年, 上・358, 中・14,21.
- ⑤ 林俊雄『グリフィンの飛翔: 聖獣からみた文化交流』雄山閣, 2006年, 174.
- ⑥ E.D. Phillips, "The Legend of Aristaeus", *Artibus Asiae*, 18, 1955, 174.
- ⑦ Christa A. Tuczay, "Motifs in *The Arabian Nights* and in Ancient and Medieval European Literature: A Comparison," *Folklore*, Volume 116-3, 2005, 277-279
- ⑧ 丑田弘忍、「ゲートルン」試訳(Ⅰ)『中京大学教養論叢』15-3, 1974年, 284-285; *The Itinerary of Benjamin of Tudela*, critical text, translation and commentary by Marcus Nathan Adler, Frankfurt am Main, 1995, 63-67.
- ⑨ 岩本裕「十字軍とオリエンタリズム: ヨーロッパとインド文化(二): ドイツ中世の楽人文学『エルンスト公』をテーマにして」『東海大学紀要 文学部』2, 1959年, 47-53
- ⑩ イブン・バットゥータ(イブン・ジュザイイ編; 家島彦一訳注)『大旅行記』平凡社, 2001年, 447-448; 2002年, 191-192; 家島彦一訳注『中国とインドの諸情報: 第一の書』平凡社, 2007年, 104, 143-144
- ⑪ 中田隆・城岡竜一・陳敬陽・岩崎杉紀・牛山朋来・久保田尚之・竹内謙介・勝俣昌己・米山邦夫・坂本晃平「2001年11月29日に西部熱帯太平洋上で発生した竜巻とその環境場について」Meteorological Society of Japan, 『大会講演予講集』Vol.83, 2003年, 87; 習田恵三・齋藤忠博・水野孝則・前平岳男・奈良税「1999年11月5日に熱帯太平洋上で発生した竜巻について」日本気象学会『天気』49, 2002年, 465-470.
- ⑫ 武富正一著, 旺文社, 37~38.
- ⑬ 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』平凡社, 10巻1979年, 90-92, 12巻1981年, 30-34.
- ⑭ G. R. Tibbetts, *A Study of the Arabic Texts Containing Material on South-East Asia*, Leiden & London, 1979, 28 トメ・ビレス(生田滋ほか訳・注)『東方諸国記』, 岩波書店, 大航海時代叢書5, 1966年252-253; ピガフェッタ「マガリャンイス最初の世界一周航海」595.
- ⑮ 藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学出版・広報部, 1978年, 45-46, 130-131.
- ⑯ J.S. Trimmingham, "The Arab Geographers and the East African Coast", H.N. Chittick & R.I. Rotherberg eds., *East Africa and the Orient*, Africana Pub. Co., 1975, 125-126.
- ⑰ M. HIROSUE, "The Island of Women" Legend in Southeast Asia and Local Navigational Pilots, The 18th Conference of International Association of Historians of Asia

(December 6 -10, 2004, Taipei, Taiwan) <http://gsv.ushimane.ac.jp/tkishi/kaken/research/041210.html>

- ⑱ 各写本・刊本の詳細については拙著『マゼラン・・・世界分割を体現した航海者』京都大学学術出版会, 2006年, 123-124.
- ⑲ Antonio Pigafetta ; testo critico e commento di Andrea Canova, *Relazione del primo viaggio attorno al mondo*, Padova, 1999, 340.
- ⑳ E.M. Beekman, *A Different Magic: What a Naturalist Taught a Novelist*, Mitra Publications Group, 2001, 24. マレーには以下の伝承もある。「大洋のただなかに Pauh Janggi という巨木がある。その根元には Pusat Tassek すなわち湖のへそという洞窟がある。そこには巨大な蟹が棲んでおり、日中一定の時間外に出る。その出入りで潮の満ち引きが生じる。」W.W.Skeat, *Malay Magic: Being An Introduction to the Folklore and Popular Religion of the Malay Peninsula*, Kessinger Pub Co., 2007, 67.
- ㉑ 野間三郎「磁石島小考」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』1941年, 1018-1035.